

新報

島根県教育庁
隠岐教育事務所
隠岐の島町港町塩口24
電話2-9772

「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業改善プロジェクト事業

海士町立海士中学校で、十一月二十六日（金）に、三年生総合的な学習の時間の公開授業がありました。職場体験を通して、働くことについて考える学習です。

【学習の主な流れ】

前時まで職場体験を通して見つけた働く理由を、班でワークシートにまとめます。

【学習活動①】異なる事業所同士で班を作り、各自の考えを共有する。

【学習活動②】元の班に戻り、働く理由を再発見する。

生徒はとても活発に、自分たちの言葉で語り合っていました。特に、学習活動①で聞いた友達のことを、学習活動②で報告し、「自分たちもあの時さあ。」と、関連付けて考え、語り合う姿が印象的で

した。

このような生徒の姿の背景にある海士中学校の取組を以下に紹介します。

■研究でめざす姿を生徒と共有

「授業デザインマップ」を各教室に掲示し、生徒一人一人の夢の実現につながっていく様子を示している。

■「総合的な学習の時間」の見直し

小学校での学習をふまえて、年間指導計画の見直しを行う。その際、探究のサイクルを回すことを大切に考える。

■地域のひと・もの・ことの実用工夫

【例】本単元において、生徒は三日間の職場体験活動だけでなく、一学期から継続して事業所を訪問している。このように、地域の大人と関わる活動を意図的・計画的に位置づけている。

■教育コーディネーターとの連携

コーディネーターが、学校と地域を結ぶ役割を果たしている。

【例】本単元においては、事業所の選定や打ち合わせに加え、公開授業に向けて、指導案検討会や模擬授業にも参加。教師以外の専門スタッフも参画した「チームとしての学校」の実現を図る。

以上、海士中学校の取組は、それぞれの学校にとっても参考になります。実態に合わせて、活用していただきますようお願いいたします。

（文責 森）

人権週間に寄せて

先日家族で会話をしているときに「男の子なのに」と発言した私に「今の発言はおかしい」と子供たちから指摘されました。自分の軽率な発言を恥じると共に、現代の子供たちの人権感覚に驚きました。私が子供の頃には、人権について「それはおかしいのではないか」と感じるような機会はなかったように思います。そのような中で知らず知らずのうちに身につけてきた人権感覚を子供たちを通して日々修正しているようにも感じています。今のような情報

化した世の中ではない時代になり子供時代を過ごした私は、周囲の大人たちの言動等から人権感覚を育んだのだと思います。しかし、今の子供たちは、自分の日常生活に関わることにネット等を通じて世界で起きている人権に関わる出来事も知る事ができます。人権に配慮した言動、逆に人権を侵害するような言動、身近な人、芸能人、政治家等の発言、どれも同じ早さで子供たちは情報を得ることが出来ます。デジタルリットに思う部分もありますが、人権に関わる出来事や多様性に触れる機会に恵まれているという見方もできます。身近な大人達の言動だけでなく、あらゆる人の様々な出来事から人権感覚を育んでいます。触れる機会に恵まれているという事は、差別の現実から学ぶ機会にも恵まれているということでもあるからです。

人権意識は、人権に関する知的理解をもとに人権感覚を磨くことで芽生えてきます。だからこそ、子供たちには、差別の現実や多様性に触れることだけで終わらせずに、そこから感じたことについて誰

かと共有したり、議論したりすることを通して、自分自身を見つめ直す機会にしてほしいと思います。

十二月四日から十日までは人権週間です。この機会に、人権について改めて考えてみませんか。（しまねがめざす人権教育第2集参照）

（文責 藤野）

わがことこのことをわがこととして考える

隠岐地区社会教育委員連絡協議会の今年度二回目の研修会が、十一月三十日（火）に隠岐の島町役場において行われ、隠岐地区の社会教育委員、各町村教育委員会事務局、合わせて二十四名の参加がありました。研修は、隠岐管内の公民館の中から二館の実践発表をもとに行われました。

一つ目の実践発表は、海士町中央公民館の元平優里さんが「みんなでつながる御波の環」と題して発表されました。御波地区は、区長さん、公民館長さん、子供会長さんが協働体制で地区を盛り上げておられます。そんな御波地区に、中学生が総合的な学習の時間で訪れ、区長さんや公民館長さんから地区の課題等を聞く

ことを通して、自分たちでできることを考え実践しました。その中学生が考え動いた地域課題解決の様子を、元平さんが地区の住民に伝えたことで、わがことこのことをわがこととして考え動く住民が生まれるという変化があったことを紹介されました。

二つ目の実践発表は、隠岐の島町布施公民館の佐藤久美子さんが「UIターン者と地元住民で生み出せるもの」と題して発表されました。ご自身がUIターンで、不安な気持ちで過ごした経験があったことから、UIターンの方々が、安心して立ち寄れる居場所づくりや、住民とつながるきっかけづくりをするために、当事者を巻き込んで取り組まれたことを紹介されました。

どちらの実践も、地域課題に向き合う当事者意識の醸成を意識しています。今後も、このようにわがことこのことをわがこととして考え動く方々を増やしていくために、どのような関わりや支援が必要なのか、社会教育委員の皆さんや公民館職員の皆さんとともに考えていきたいと、研修を通して改めて思いました。

（文責 吉山）